

自然教室新聞

兵庫県自然教室 神戸市中央区磯上通五―一 門屋ビル本館

078 (221) 5103

9
守れよ自然 育てよ子ども
兵庫県自然教室 1984.9.1 第133号

例会には、こんなからこうで...!

〈あなたにいい例会、用意はいいか?〉

自然教室のトレードマーク
みどりのぼうし、名札を
つけて、あそびたいように。

自分の体を洗うため、
長髪で、長髪ぼん、
(スカートはため!)

各館ぐらゐりかゝり
けど、なぐてもいいよ。

おやつに
ついては、
リーダーに
まかせ!

お弁当
おはし
ハンカチ
ティッシュ
ホリスくろ
大・小

古新聞
ばんそうこう
交通費
虫めかね
水とう
お弁当
おはし
ハンカチ
ティッシュ
ホリスくろ
大・小

自然教室のトレードマーク
みどりのぼうし、名札を
つけて、あそびたいように。

自分の体を洗うため、
長髪で、長髪ぼん、
(スカートはため!)

各館ぐらゐりかゝり
けど、なぐてもいいよ。

おやつに
ついては、
リーダーに
まかせ!

お弁当
おはし
ハンカチ
ティッシュ
ホリスくろ
大・小

古新聞
ばんそうこう
交通費
虫めかね
水とう
お弁当
おはし
ハンカチ
ティッシュ
ホリスくろ
大・小

さあ、自然教室が始まるぞ!

今月から、新学期に入ります。55年
度の自然教室の始まりです。新しく自
然教室に入った会員のみんな、よろこ
び、期待のみんな、今年もがんばろう。
自然の中で遊びながら、いろいろなも
のを見、体験し、リーダーといっしょ
に、すばらしいナチュラルリストにな
りましょう。それには、例会に出
よう。でも手からは、例会には行けな
い。弁当がなかったらおなかもすくた
ろう。上の靴を見て、例会にはこれだ
けのものがないんだ。もう一度君のリ
ストの中を確認して、自然教室
のぼうしと名札、会員証とB6ファイ
ルは絶対に忘れないように。新刊の方
は郵送か例会の時にでもお渡ししま
す。

自然教室もつてくる便利だよ。

☆自然観察と生態シリーズ(小学生用)
各90円

☆カラー自然ガイド(保護者用)各500円
などをリーダーたちは活用してあげ
て、その他いろいろ、各地区リ
ーダーに聞いてみて下さいね。それ
は例会で会いましょう。

-1-

「守れよ自然、育てよ子ども」を目標に十二年以上も
出し続けられてきたこのミニコミは、数えきれないほ
ど多くの子どもに、自然の楽しさを教えてきた。自然
教室は子どもと親を対象に開かれるが、その中心は子
どもだ。兵庫にはいま、「まつぼっくり」「あらんこ」
「のこのこ」など九つのグループが地区ごとにあり、
月に一回例会を開いている。自然観察に向かない冬な
どは、自然史博物館や青少年科学館へ行って、屋内で

植物や自然の仕組みを学んだりしている。

この各グループの月ごとの行事計画を知らせるのが
「なににな板」だ。そして、こんな所へ行つたよ、こ
んなことがあったよ、を知らせるのがこれも毎号載る
「かくちから」である。このミニコミが百号を迎えた
一九八二年にアンケートをとったところ、毎月読んで
いる子供が七九%と出た。その中でもこの「なににな
板」と「かくちから」が評判がよいという結果が出た。
これからもわかるように、子どもが読むことを前提に
わかりやすい言葉づかい、絵や写真で見せることに神
経を注いでいるのがこのミニコミである。

だが、ただ自然の楽しさを教えるだけでは、子ども
が成長して自然を守る側に立つとは限らない。そこで
このミニコミは「合成せんざいって何ですか」という
記事を連載したり、ジュースやアイスクリームはどう
してできるかという記事の中で、合成着色料など添加
物の話もきちっとする。「あかしおの話」もある。三
つ子のうちに魂を入れてしまわないと、人間は世の中
に流されてしまう、だから……と自然と平和な地球が
一体のものであることを教える。自然観察会はリーダ
ーの力に負うところが多いが、量、質とも、この自然
教室はきわめてすぐれている。ミニコミのすばらしさ
は、それに支えられているといってもいい。月刊で百
四十六号までできた。

目次

I ミニコミの時代

- なぜミニコミか……………10
- 一 自立した市民の誕生とミニコミの群生……………12
——六〇年安保を背景として
- 二 地域に根ざしたメディアの登場……………30
——六〇年代後半に果たした意義
- 三 ミニコミが社会の流れをつくった時代……………43
——七〇年代前半のミニコミ状況
- 四 “冬の時代”を生きぬくミニコミ……………61
——七〇年代後半の運動誌を中心として
- 五 逗子の住民パワーとミニコミ……………84
——八〇年代の一つのモデルとして

II 当世ミニコミ一〇〇選

瓢鰻亭通信 112

あくまでも反権力……………前田俊彦

声なき声のたより 116 / NO!! 117 / 筑豊通信 118 / おんな 119 /

水牛通信 124 / 彷徨 125 / 交流 126 / イオム通信 127 / サットヴァ 132 /
これでいいのかニュース 133

親父のムスコ……………岩田健三郎

へらへらつうしん 135 / 協働者 138 / 監視団ニュース 139

基地の街から……………相模補給廠監視団

世界から 143 / COMRADE 144 / おーJAPAN 145 /

ROUND UP Ooze 146 / ぴーす・ぴあ 147 / 反原発新聞 148 /

人民新聞 149 / 四国西南海岸レポート 150

なぜガリ版で?……………安岡英二

想像 154 / だんだんに 155 / おおばい通信 158 / 人間家族 159 /

すみれ通信 160 / 出会い塾&ヒントボックスからの通信 161 /

月刊焼酎通信 162

焼酎ブームから焼酎を守れ……………津村喬

果林 166 / 消費者リポート 167 / 水車むら通信 168 / 銀河通信 169 /

月刊リサイクルニュース 170 / 80年代 171 / 暮しの赤信号 172 /

面白貼紙情報 173 / 水俣 174

ミナマタを全国に……………本田啓吉

邂逅 178 / 嫌煙権だより 179 / 父母の会通信 180 / そよ風のように

街に出よう 181 / 八幡人工肛門友の会誌 182 / みのお忠魂碑違憲訴訟

ニュース 183 / 丸正事件はまだ終わっていない 184 / 甲山裁判支援

通信 185 / 徐君兄弟を救うために 188 / むくげ通信 189 / おんなの叛逆 190

まず自らへ問いかけを……………久野綾子 191

草の実 193 / 田無・保谷どんぐり 194 / あごら 195 / あゆみ 199 /

ひらひらニュース 200 / 地域—家族 201 / かわら版 団地のをんな 202 /

売春問題ととりくむ会ニュース 206 / アジアと女性解放 207 /

女から女たちへ 208 / AACW 209 / かわり 210 / 異議あり! 211

具体アクション!……………『異議あり!』編集部 216

君が代処分 218 / 大学論通信 219 / 教科書問題 市民の声 220 / きら 221 /

無名百年 222 / 人間になる 223 / がっこう かいほう しんぶん 224 /

年輪 226 / 人権と教育 227 / おやこ新聞 228 /

夜間中学日本語学級通信 230 / 郷土教育 231 / 月刊市民 232

議会ゲリラで「情報公開」……………豊明市民連合 233

ぽっぽ 236 / 生活同人 237 / めだか通信 238 / なぜ 239 /

市政研ニュース 240 / 市民会議ニュース 241 / ひろば 242 /

たまご通信 243 / 生活と自治 244 / 筏 245 / きくら通信 246

ミニコミ初体験……………平松南 247

草刈り通信 250 / わたらせ川通信 251 / 公害を逃すな! 252 /

岩佐訴訟ニュース 253 / 満俺 254 / 草の根通信 255

いつになったら赤字になるのか……………松下竜一 256

ほたるこい 259 / 月刊かわぼえ 260 / 淀川の自然を守る会会報 261 /

びわ湖と人 262 / SOS 263 / ELSA 264 / 自然教室新聞 265 /
いわつばめ通信 266

ミニコミを読む

埋もれた母の自分史3 おんな 四十六集(一九八四年十二月) 120

ハイケイヒロヒトはん イオム通信 二百八十九号

(一九八五年二月二十八日) 128

近ごろの うちとこ あんない へらへらつうしん(一九八五年六月) 136

戦闘車両、韓国釜山へ 監視団ニュース 九十九号

(一九八五年六月十五日) 131

——人たちとの会話——白浜・一本釣りレポート 四国西南海岸レポート

十二号(一九八四年二月) 152

あなたも草の根の郵便屋さん? だんだんに 十六号

(一九八五年八月三日) 157

栗色の眼と、すこし語尾をひっぱる声と 溝口マスエさんの死に

よせて アイリーン・スミス 水俣 百十五号(一九八四年八月五日) 176

山田悦子、最終意見陳述 甲山裁判支援通信 百七十五号

(一九八五年七月二十五日) 186

目次 あごら 八十九号(一九八四年八月) 196

思考の逆転 平田ひと江 あごら 八十四号(一九八四年三月) 198

多摩ニュータウン初の個室マッサージ 多摩クリスタル考 高橋泰子

かわら版 団地のをんな 十八号(一九八五年三月) 203

流言蜚語めまい通信 異議あり! 二百五十八号

(一九八五年五月一日) 212

教師百態陳列一気 異議あり! 二百六十三号

(一九八五年七月十五日) 214

臨教審論議はまやかした がっこう かいほう しんぶん 二十五号

(一九八五年五月二〇日) 225

かくされている子どもの宝 みつけないとソンをする児童憲章

おやこ新聞 七百四十八号(一九八五年五月十五日) 229

管理教育の古里から 座談会 それからの豊明高校 月刊市民 九十号

(一九八四年八月二十五日) 234

北方・八幡の桜並木復元がほぼ確定!! さくら通信 三十六号

(一九八四年七月) 248

III 全国ミニコミ一覽

327

“あとがき”対談

328

装幀 II 吉田カツヨ

表紙・扉・イラスト II 貝原浩

I
ミニユミの時代



なぜミニコミか

ミニコミは個人やグループが、発行する小さな出版物だが、ひと言でこういうものと言うのは大変むずかしい。まず出す人によって、目的や内容や形態がみなちがう。一九一八（大正七）年に名古屋で『大公論』（のちに『金剛石』さらに『人間改造』に改題）を創刊した松井不朽は、八二年一月に亡くなるまで「言論報国の手段」としてこの個人新聞を発行した。『大公論創刊』の年は、富山県下ではじまった米騒動が各地に波及するなど、国民は貧困にあえいでいた。見回せば「番犬と御用新聞ばかりでろくなものがない」ため、「正義の貫徹」のために私財を投げ打って一万部前後のミニコミを発行しつづけた。松井の主張はもっぱら、日本の支配原理となった「天皇制」の打倒であった。

ハンセン病者の療養施設である熊本県・菊池恵楓園の患者たちが一九五〇年に創刊した『菊池野』は、「命の乏しい者が一日一日を足に代えて活字に残す、生きている証」である。東京都武蔵村山市の大日方真は六一年に「発言の自由を自分で確保するため」に、『教育のきろく』を創刊した。その他、「日陰者の怒りの場」「運動のシンボル」として、あるいは「セックスみたいなもの、やりたいときにやり、やりたくないときにはやらなくていい

のだから……」という理由でミニコミを出している女性もある。

このように、ミニコミは個々ばらばらに発行されながら、全体として社会の陽の当たらない部分、重要ではあっても多数の理解や合意を得られない問題、あるいはきわめて個人的な意見発表のメディアとして発行され続けている。それらは一般的に個人誌とグループ誌、あるいは運動体から発行される出版物などのように、発行者の性格のちがいがミニコミの性格を決めているのがふつうである。

いずれにしても、ミニコミによる情報伝達力の幅はうんと小さい。だがそれはミニコミの役割が小さいということではない。ミニコミで出された問題がマスコミに載って大きく広がっていったり、世の中の動きに少なからぬ影響を与えることはしばしばである。たとえば水俣病についての知識や関心が国内だけでなく海外にも広がっていったのは、『告発』というミニコミが世論の起爆剤になったからだ。

ではミニコミはすべて社会との関わりを重視するものかというところ、これも発行者や発行組織によって千差万別であるからやっかいだ。

一 自立した市民の誕生とミニコミの群生

——六〇年安保を背景として——

ミニコミとは何だろう

ミニコミとはおおよそこんなもの、という考えを示しておかないと、これからミニコミについて述べる足元が決まらない。そこで、以前から私が考えているミニコミの概念を示す。

- 1 自主・自立性
- 2 反権威・反体制
- 3 個性・独自性

この三つは、メディア全体に求められるもので、ミニコミだけの条件ではないかも知れない。しかし世の中には、わざと自主性を放棄して権威におもねり、個性を消し去って利益のみを追求するメディアもないわけではない。これは、発行部数の大小にかかわらず存在する。はっきり言えば、小さなメディアがすべてミニコミではないということをおは言いたいのである。別の言い方をすれば、売る、広告をとるなど、利潤の追求を目的に発行されるメディアは、ミニコミとは言えないということである。

ではミニコミは売ったり広告をとってはいけないのかということになるが、そうではない。それはむしろ、積極的に行なわれるべきだ。ただしそうした商行為はメディア継続の手段であって、目的であつてはならないのである。自立した市民が自主的に発行するということは、当然権威や権力の対極に身を

属關係が固定化したのがこの六〇年安保である。

ふつうの市民を組織しなかったデモ

多くの人がびとが、学校や仕事を休み、国会周辺のデモに参加した。国会を幾重にもとりまく連日のデモにうんざりした岸信介は、いかにも彼らしい詭弁で「院外の運動に屈すれば日本の民主政治は守れない。私は国民の『声なき声』に耳を傾ける」と語ったと新聞が報じた。これは、安保に反対する国民の行動力にかえって弾みをつけた。その一人が、小林トミである。小林は五四年に東京芸大を卒業、子どもに絵を教えながら専攻科に進んだ。岡本太郎らの現代芸術の会の活動にも参加、ここで鶴見俊輔とも知り合い、思想の科学研究会のサークルに参加するようになった。

「デモに参加しないことは、安保強行採決を支持することになる」と考えた小林は、サークルの仲間と「誰デモ入れる声なき声の会」という横断幕を持ってデモに参加、「市民の皆さん、いっしょに歩きましょう。五分でも百米でもいっしょに歩きましょう」というビラを配った。小林たちが「U2機かえれ、総選挙をやれ！ 皆さんお入り下さい」と書いた横断幕を持ってデモに参加したのは、六月四日である。そのことは、新聞にも出た。私も読んだ。そのとき受けた新鮮な印象をいまも覚えている。数えきれないほど多くの人がデモに参加したといっても、それまでは誰でも入れるデモはなかった。安保阻止国民会議は、政党や労働組合が中心だった。学生デモは、三派全学連を中心に、それぞれに系列化されていた。その年の三月大学を卒業してしまった私などは、それこそちっぽけな会社に就職して編集の仕事をしていたので、組織というものがまるでなかった。デモをしたくても、入るところがないのである。国会前のプラタナスの並木の下で、これはどこのデモ、あれはどこのデモと数えながら、ただ立っている

置くということである。資本が集中すれば寡占状態が起こり、体制が強固になれば権力が生じる。権力は大衆の権威信仰の上に成り立っている。これに対して自分の意見を自由にぶつけて意識の变革や新しい行動を促し、精神の前衛性をつねに保っていなければならないのがミニコミである。それ自体が、独立した人格を持ったメディアとして存在しているのが、ミニコミである。

これら三つの条件は、本来ジャーナリズムが持っていなければならないものだ。だがマス・ジャーナリズムには、これらの要素は希薄だ。しかし、ジャーナリズムはマスの専売特許ではない。ミニであってもジャーナリズムとしての役割は果たせるし、現にミニコミは、すぐれたジャーナリズムのメディアである。それらがどのように時代とかかわって、どのような意義と役割を果たしてきたかをさぐるのが本稿の目的である。

貧しさからの脱却

白米十キロ八百七十円（現在のおおよその価格三千六百円、以下同じ）、もり・かけそば三十五円（四百円）、コーヒー一杯六十円（三百五十円）、新聞代一カ月三百九十円（二千六百円）、封書一通の料金十円（六十円）、銭湯代十七円（二百四十円）。

これは、「激動の六〇年代」の幕開けとなった、一九六〇年の生活物価一覧表である。六〇年に大学を卒業した私の初任給は一万二千元だった。これは大卒初任給の平均であったが、サラリーマンの仕事である背広は、月賦でしか買えない金額であった。いま二千五百円ぐらいの散髪代の標準は百六十円だったが、わずかの割引を求めてあちこち探し歩き、散髪は「百円床屋」へ行った。が、そんなことはどうでもいい。ともかくそれから十年間の日本は、奇跡の高度成長を遂げたのである。世の中では以降

の時代を、成長の六〇年代、変動の七〇年代、調整の八〇年代ないし安定の八〇年代と呼んでいる。たしかにそのとおりで、いまの日本は“安定”のまったただ中にある。

だがこれは一方向からの見方であって、ちよつと見方を変えれば、そこには別の日本の姿が立ちあらわれてくる。だからミニコミの根つことなる状況は何だったかを考える場合、こうした区分は必ずしも正しくない。と言うより、少し立場を変えればそこには違った時代相が立ちあらわれてくる。社会一般が“成長の六〇年代”と言うのに対し、“激動の六〇年代”という呼び方もその一つである。

六〇年代には、日本のあらゆる転換が準備され、今日に至る“繁栄”と“安定”の設計図がつくられた。この十年間は、新しいものを次々生むと同時に、また多くのものを消滅させた。政治的にも社会的にも、文化的にも国際的にも、そして国民の意識も、このころから大きく変わった。敗戦から十五年かけて培った“新生日本”への夢が破られたことによって、アメリカ型“近代市民社会”への明確な転換が行なわれた。軍事的、政治的、経済的にアメリカの傘の下に入ることによってアメリカ的社会への道を、人びとは選んだのである。

そうした国策を大衆が許容した理由は、戦争を拒否し民主的な市民社会をつくるという“新生日本”の理念を、貧しさはイヤだという物質的欲望によって売り渡したからである。アメリカの物質的豊かさを見せつけられ、背広を月賦で買い、百円床屋を探し歩く自分にイヤ気がさした。それほど日本人の生活は貧しかった。軍費に膨大な国家予算を消費し、やつと戦争に負けてもしばらくは食うもの、着るもの、住むところなしの生活を強いられた人びとは、貧しさにはうんざりしていた。人びとにとって平和は、物質的豊かさを保障するものでなければならなかった。

新しいミニコミの誕生

アメリカに従属する社会体制と日本のアメリカ化のためにどうしてもくぐらなければならなかったのが、六〇年の日米安保条約の改定である。その問題をめぐるあがきの中から、自覚的市民によるもう一つの日本をつくるための、新しいミニコミが生まれた。それがミニコミの世界に、新しい生命を与えた。

一九四五年の敗戦直後から五九年に至る間にも、たくさん小さなメディアが発行されている。だがここではふれている余裕はない。興味のある方は拙著『ミニコミ戦後史』（三一書房）をお読みいただきたいが、この時代のミニコミをひと言でいえば、サークル誌、同人誌、会報、機関紙などが中心であった。これらは、組織を中心に出されたメディアである。同人誌やサークル誌発行のグループを組織といえるかどうかむずかしいが、このころは職場や地域、あるいは労働組合という組織の構成員がインフォーマル・グループとしてのサークルや同人をつくり、そこから小さなメディアを出した。だから広く考えれば、組織に準拠したメディアといえる。

それに対して六〇年以降生まれた新しいタイプのミニコミは、所属する人びとを内側に吸引するという原則を持つ組織性に依拠していない。たとえグループを結成しても、地域や職場を超え、独立した市民としてのつながりを前提としている。考え方や問題意識などを唯一の結び目として、横に広げていくためのメディアとして発生してきた。その典型が、六〇年安保闘争をきっかけに、この年の七月に創刊された『声なき声のたより』である。このミニコミを語る場合、その母体となった六〇年安保闘争に少しふれる必要がある。

六〇年安保はどう闘われたか

アメリカの日本防衛義務の明確化などを中心とする日米安全保障条約の改定交渉が開始されたのは五八年十月からである。しかしアメリカの日本防衛の義務を明確にすれば、日本も自動的に相互援助の義務を負うことになる。しかも、これが十年以上にわたり固定化することになれば、アジアの緊張関係にいつそう拍車をかけ、同時に憲法が禁じる防衛力増強につながるとして国民の多くは反対した。

そこで五九年三月、社会党、総評、原水協などが中心になって、日米安保条約改定阻止国民会議が結成された。しかし当時の岸内閣は、この法案を六〇年五月十九日に衆議院の議事審議の原則を破って抜き打ち採決し、参議院に送った。そして自然成立を待って、六月十九日に両院を通過した。この過程で広範な国民の参加を得て行なわれたのが安保反対闘争である。六〇年五月二十六日の第十六次安保阻止国民会議の統一行動には、全国から集まった十七万人のデモ隊が国会を包囲した。六月四日の安保改定阻止第一次実力行使には、国労の早朝ストをはじめ労働団体、学生団体、民主団体など合計五百六十万人が参加したと総評は発表した。これに先立ち五月二十一日には、東京都立大学教授竹内好が、また三十日には東京工業大学助教授鶴見俊輔が、安保強行採決に抗議をして大学を辞めた。

六〇年安保は政治闘争としてはもっとも多くの国民がみずからの意志で、強い行動を示した闘いであった。そうした高まりを受け六月十五日、安保阻止第二次実力行動には全国で五百八十万人が参加し、安保阻止国民会議や全学連が国会デモを行なった。その中で右翼が全学連主流派、新劇人などのデモになぐりこみ、六十人が負傷した。一方、全学連主流派は国会突入をはかって警官隊と衝突、東大生樺美智子が死んだ。しかし、このような空前の反対運動にもかかわらず、日本の政治的・軍事的アメリカ従